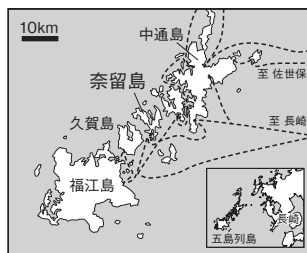


[レポート]

交流空間と写真館を開業

ライター 竹内 章



奈留島：五島列島の福江島と中通島の中間にある島で、面積23.71km²、周囲75.4km、人口2,278人(平成29年10月末現在)。海岸線は出入りが激しく、島の面積に比べて海岸線が長いことで知られる。湾入した入り江に22の集落が点在し、ハマチ・タイの養殖などの漁業を主産業とする。

長崎県・五島列島の、ほぼ中央に位置する奈留島。まるで鳥の足跡のような形をしたこの島は、入り組んだ海岸線が良港を生み、漁業で大いに栄えた歴史がある。

この島の女子高生が書いた一通の手紙をきっかけに、ユーマンこと歌手の松任谷由実さんが「荒井由実」として活動していた時代、奈留高校(当時は五島高校奈留分校)に校歌をプレゼントしたエピソードを聞いたことがある人も多いかもしれない。

最近では、島北西部にある江上集落が世界文化遺産候補「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産の一つとして名乗りを上げており、注目度が高まっている。

二〇〇四年、五島列島南部の一市五町が新設合併する形で五島市が誕生したが、奈留島と前島を含む奈留町地域に限れば合併時に比べ人口が約四〇パーセントも激減。五島

市全体での減少率約二〇パーセントをはるかに上回るペースである。現在、奈留島では空き家バンクの登録推進など移住・定住策が強化されている。

今回は、そんな厳しい環境にあえて身を置くことを決断し、コミュニティスペースを開業したイターンの女性と、Uターンして島で唯一の写真館を開いた男性を紹介する。

この場所で、ふつとなかが生まれれば

「コミュニティスペース」かけこみ代表／イターン 東奈津子さん

コミュニティスペースをオープン

二〇一七年夏、奈留港から歩いてすぐの古民家で、オー



「かけこみ」に込めた思いを話す東奈津子さん（34）。

ブンしたばかりのコミュニティスペース「かけこみ」が、にぎわいを見せていた。

この日は、朝から赤ちゃんと母親のペアが「ベビーヨガ」を体験。ヨガが終わると、入れ替わりで島のお年寄りがやってきて、もぐさづくりから始める「お灸教室」が始まった。両イベントの合間には、島の人が島外の友人を連れて顔を出す場面も。

「いろいろな人がこの場所に集い、それぞれの時間を過ごしてもらおう。そんな中で、自然と交流が生まれ、そして『なにか』が、ふっと生まれるような、そんな場所にしたいんです」

「かけこみ」を立ち上げた東奈津^{ひがし}さんは、その場所に込めた思いを口にした。

東さんは大阪府寝屋川市出身。大学卒業後に旅行会社で働き始めたが、小笠原諸島など国内の島々を旅したことを機に島が大好きに。間もなくウェブ制作会社に転職したのも「島で暮らすなら手に職をつけておかないと」と考えてのことだった。

そして二〇一三年秋。三〇歳のときに、都会から地方に赴任して地域活

性化に取り組む「地域おこし協力隊」制度を活用し、奈留島に移住。念願の島暮らしを始めた。五島市が、島に配属する協力隊員を募集していたことが縁となった。

協力隊として与えられた業務は本来、体験型観光の推進だったが、東さんはその枠にとらわれず業務外でもさまざまな取り組みに挑戦した。

サンタクロースの格好で島を歩くイベント「奈留島サンタラン」を企画したほか、島の高校生が考案した奈留島のご当地キャラ「うに男^お」のプロモーションなども手掛けた。東さんは協力隊時代を「島暮らしは穏やかなイメージでしたが、とんでもなく濃い日々で、想像以上に波乱万丈でした」と振り返る。

島で暮らす決意を固めたのは、三年間の任期満了が目前に迫っていた二〇一六年の夏。

せっかく島で暮らすなら、どこかに勤めるよりも自分で何かを始めたい。自分に何ができるだろう、島には何が必要なのか……。

あれこれ考えるうち頭に浮かんだのが、以前訪れたことがある別の島のゲストハウス。いろいろな人を結ぶ「橋渡し」をしているユニークなおかみさんがいて、なんとも言えない魅力があった。

そして、たどり着いたのが「かけこみ」のコンセプト。島の人、島外の人、若い人、お年寄り……。いろいろな人がふらっと立ち寄り、出会い、交流できる場所を奈留島

につくれたらいいな、と思った。

港のターミナルには、行くところがないのか長い間ぼんやりしている人や、パソコンをパチパチしている人もいる。「かけこみ」を港に近い場所に構えたのは、島外の人にとってアクセスがいいだけでなく、そんな人たちの受け皿にもなりたかった。

起業支援制度を活用し、事業を立ち上げ

二〇一七年一〇月で開業三カ月目を迎えた。その間の利用客は大半が地元の人だが、毎日顔を出す常連さんもある。



2017年夏にオープンしたコミュニティスペース「かけこみ」。

島外からは、まだ近隣の島から「ちょこちょこ人が来る程度」だが、島に移住してきたばかりの女性がこれまでの経験を生かして「かけこみ」で整体サロンを始めるなど、いろいろな人を取り込み

たいという狙いは着実に実を結び始めている。

「使い方は、利用者次第。場所代をいただいています。が、やりたいことをやってもらって、その上で私もお金をいただければ、うれしです」と東さんは話す。

収入の柱は、コーヒーや自家製パンなどの軽食販売をはじめ、場所の使用料、

「うに男」をモチーフにしたTシャツなどの物販。

提供している食べ物の単価が低いので、なかなか利益は出ない。販売数を増やすことに力を入れると、今度はお客さんと交流する時間が取れなくなってしまうそうだ。

『「かけこみ」は、×コミニケーションの略。交流から生まれる『なにか』を楽しんでもらいたい、という願いを込めた名前です。なので、自分自身が交流できなくなってしまうのも避けたいのですが……』と話す。

現在は、美術館やインフォメーションセンターなどでアルバイトしながら一定の収入を確保している。

「かけこみ」は、市の空き家バンクに登録されていた古民家を借り、改修して使っている。「家の中にあるものは使ってもいい」と言われたので、ソファやイス、タンス、食



東さんがプロモーションを担当する「うに男」Tシャツ。

行政からのメッセージ

◎気軽に島暮らしを始めてみませんか

東さんが島で手掛けた取り組みは、さまざまな面でこれまでにない「交流」を生み出してくれていると感じています。

例えば「こんな人がいたんだ」という島の隠れた人材を掘り起こして行政とつなげてくれたり、「かけこみ」でヨガ教室を開いて島の女性が横のつながりを広げるきっかけをつくったりもしました。

島外との交流に目を向けると、「奈留島サンタラン」や、島を代表する祭事「奈留神社例大祭」の観光ツアーを企画するなど、交流人口の拡大や島外からの観光客誘致にも貢献しています。

東さんは、地域おこし協力隊という制度が創設されて間もない時期に、隊員として島に移住しました。当時、行政側も協力隊制度に対して手探りだった部分があり、活発に活動していた東さんを十分にサポートできたのか、という思いがあります。

そのような時期を過ごしながらも、東さんの懸命な取り組みは、島の方々の心を徐々に変えることがあったように思います。島で「何かをやろう」というとき、それまで物事にあまり興味を示さなかったような人が、その気になってくれるようになった、というケースも目の当たりにしてきました。

私は市職員として、東さんに起業に関する情報を提供したりしましたが、一個人としてもサンタランの実行委員会メンバーに加わるなど、行動をとともにしてきた部分があります。

今後も、東さんのペースで徐々にまわりを巻き込みながら、「奈留は少しずつ変わっているのではないか」という今の雰囲気が続けばいいな、と願っています。

移住・定住促進に向けた施策は奈留でも行われていますが、なかなか実を結ばず苦労しているのが実情です。

行政の立場としては、どんどん移住者が増えてほしいと思います。その一方で、主張が強すぎたり極端に何かを変えようとする動きが活発になりすぎると、もともとあった島のコミュニティーを壊しかねません。

地域に入って、積極的にまわりの人とかわりを持ち、「島での生活」ができる人に来ていただきたいです。「島に来たからには永住しないと」と、あまり肩ひじ張らず、まずは気軽に島暮らしを始めてみよう、という気持ちから始めてもいいのではないのでしょうか。

(五島市奈留支所 地域振興班まちづくり担当 山下大輔)

器類などは、そのまま活用している。

間取りは、ヨガ教室も開けるような広々とした和室をは

じめ、イスに座れるテーブルコーナーもある。

改修や設備投資に使った費用は、「島でほかの人も申請できる補助金は使いたくない」との思いから、地域おこし

協力隊のみを対象とした「起業支援補助金」の一〇〇万円

を原資とした。

資金集めの新しい手法として近年、注目が集まっている「クラウドファンディング」(インターネットサイトを通じ、プロ

ジェクトに共感してくれる人から広く資金を集める方法)を勧める声もあったが「恩をどう返したらいいのかわからない」と

見送った。

改修にはそれなりに費用もかかったが、「その洗面台も、あそこに貼ってあるタイルも、実は全部もらったんです。足りないものがあったても、どこからか持ってきてくれる人がいて、それが島の良さというか……。本当にありがたいですね」と東さんは目を細める。

島暮らしのデメリットとしては、インターネット通販全盛の時代とはいえ、モノを買うとき実際に手に取ってサイズや色、質感などを確認できないことを挙げる。

島の将来を考えたとき、島を維持していくには、子どもたちの力がとても大切だと考えている。そのために、何か「かけこみ」にできることはないかと考える。

「子どもたちには、『かけこみ』でいろいろな人に出会ったり、いろいろな生き方や職業があることを知ってもらうって、将来の選択肢を増やすきっかけになればいいなと思います。『かけこみ』が、子どもたちの背中を押してあげような、そんな場所に育ってくれればうれしいですね」

写真館が島に帰ってきた！

「写真のフルス」代表／Uターン 古巣靖彦さん

五年前、奈留島にUターン

本土では当たり前のサービスが、離島ではすっぱりと抜



奈留島へUターンした経緯を説明する古巣靖彦さん（37）。

との奈留島にUターンして写真館を開業したとき、島には写真館が一軒もなかった。

「昔あった写真館がなくなってしまったと聞き、一軒もないのなら商売になるのでは、と思ったんです。別になくても問題ないのかもしれませんが、あればきっと便利なのはですよね」

たまたま目にした求人票をきっかけに、奈留島出身の古巣さんが福江島にある写真屋で働き始めたのは、一八歳のとき。もともと写真に関心があったわけではないが、機械をいじるのが好きだったので興味を持った。

二四歳で、今度は長崎市にある別の写真屋で働き始めたが、三〇歳を超えても思うように収入が増えず、自分の年齢も考えながら今後の人生をどうしようかと考えていたとき、ふるさとに写真館がないことを知った。

「昔は、確か二軒あったはずですが、もう七、八年前に最

け落ちていることがある。

スーパーや医療機関のように、ないと日々の暮らしにさえ支障が出るものがある一方、なくても生活はできるが何かと不便、といったものもある。

「写真のフルス」代表の古巣靖彦さんが、ふるさ

後の写真館が営業をやめたと聞いたんです。隣の福江島まで、わざわざ船に乗って写真を撮りに行く人までいると聞いて、大変な状況だなと思いました」

奈留島に戻って写真館を始めようかどうか気持ちが揺れていたとき、実父が病気で余命を宣告される事態となった。このことが、結果的にふるさとに戻る決め手となった。

中小企業庁の創業支援制度を活用

約三カ月間の準備期間を経て「写真のフルス」がオープンしたのは二〇一三年八月。デジカメのプリントや証明写真撮影、奈留島内限定での出張撮影などを手掛けている。従業員はいないが、成人式の時などには母親の手を借りることもある。

出張撮影は記念行事の集合写真などが主だが、高齢化が進む島の実情を背景に、なかなか外出できないお年寄りの自宅まで行き写真を撮る、



「写真のフルス」外観。

というニーズもあるという。

営業面では、商圏人口が島内に限られているため、年に二回、チラシをつくって島内で全戸配布するぐらいで、あとは口コミが中心。古巣さんの母親も島の知り合いに声をかけてくれているといい、このように家族と連携できることがUターンで地元に戻るメリットの一つかもしれない。

店舗として使っている物件は、両親が探してくれた元寿司屋の空き店舗を借りている。現状復帰が不要で好きなように改修してもいい、との約束も取りつけ、撮影用の広々としたスペースも設けた。

起業に際して投じた費用は、数百万円。公的支援制度では、中小企業庁が創業支援などを目的に実施する「地域需要創造型等起業・創業促進事業」を活用した。補助金の二〇〇万円は、業務用プリンターの購入費などに充てた。

この制度を活用するよう勧めてくれたのは、商工会で働いている同級生。当初は別の補助制度に申請する予定だったが、今回利用した制度の方が補助額が多く、「ずいぶん助けられた」と古巣さんは強調する。

大きく伸ばすより現状維持を

起業から丸四年過ぎたが、経営状況は「なかなか厳しい」のが実情だ。

そもそもデジタカメラの普及などにより、昔のように写真館に行って写真を撮影したり現像する機会が激減し、

写真館という業態自体、利益が出にくい体質となっている。お店を開いてから気づいた島ならではの課題は、子どもに関係する撮影ニーズが極端に少ないこと。

例えば、子どもがいる家庭であれば七五三のお祝い撮影は定番で、通常はそれなりに需要もあるはずだが、それが

ない。島に子どもが極端に少ないことが背景にある。また都市部でインスタントカメラの人氣が高まっていることを知り、さっそく仕入れて販売を始めたが、売れなかった。古巣さんは「なかなか注目が集まらなかった。都市部と島の間に、情報格差があるせいではないか」と分析する。

島からのメッセージ

●最初は不安だった幼なじみのUターン

私は小学生のとき島に引っ越してきましたが、古巣さんとは、その時以来のつきあいです。

古巣さんが島にUターンすると聞いたときは、本音を言うと、大丈夫かなと思いました。

もちろん個人的にはうれしかったのですが、当時から過疎化が進んでいましたし、せっかく島に戻ってきても「やっぱり島では暮らせない」と、1年もたらず島を離れる人を見てきたからです。今では帰省すらしない島出身者も多くなりました。

古巣さんが戻ってきた直後は、奈留島の現状について、よく実情を説明した記憶があります。人がいないけど大丈夫か、しかもどんどん減っているぞ、お客さんも来るかどうかかわからない——。そんな会話だったでしょうか。

島に古巣さんが写真屋を開業して、もう丸4年になりました。正直、すごいと思います。戻ってきてすぐ、きっと「人が減ったな、若い人もいない」と痛感したでしょう。開業して1年、2年と暮らすうちに、どんどん人が減っていくのを目の当たりにしてきたはずです。

商売も決して楽ではないと思いますが、そんな中でも、踏ん張って持ちこたえているのは立派です。

とにかく、写真屋が古巣さんのお店しかないんです。貴重です。以前は1軒も写真屋がない時期があり、同じ五島市内ではありますが隣の福江島まで撮りに行ったこともあります。そうになると、もう半日がかりです。

写真を撮るのに、船に乗って海を渡ってまた帰ってきて半日も仕事を休んだら、仕事が成り立ちませんよ。

今では急に写真が必要になっても、ちょっと電話して手が空いているようならパッと撮りに行けるし「現像できたら持ってきて」なんてお願いすることもできる。

ずっと営業してもらえるのが理想ですが、1年でも長く続けてほしいと思います。

移住者を増やすには、まず働くところが必要ではないでしょうか。若い人が定着できるような、そんな仕事が必要です。

それに住むところも大事。空き家はたくさんあるけれど持ち主がいなかったり、中に荷物がいっぱいあってどうしようもないとか、そんな話ばかりです。何とかしなければ、移住を希望する人がいても困るだけだと思います。

(会社員 奈留島在住 坂下大吾)



スタジオで撮影の準備をする古巣さん。

その一方で、島ならではの環境がビジネスを後押ししているケースもある。

昨春、国境離島新法の施行に伴い、対象地域の住民を対象に船や飛行機の運賃が引き下げられたが、割引運賃のサービスを受けるには「島民割引カード」をつくる必要がある。このカードには顔写真が必要のため、本年度は思いがけず写真撮影の仕事が増え、売り上げに貢献した。

また本来は喜ばしい話ではないが、高齢化が進んでいるため葬儀写真や遺影用の写真といったニーズも一定数あるという。

今後の業績については「大きく伸ばす、というよりは、何とか現状を維持していきたい」と現実的な目標を掲げる。

島の江上集落（江上天主堂とその周辺）が「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産の一つとして世界遺産登録を目指しているという好材料もあり、観光写真の分野で需要が高まるのではないかと期待を寄せている。

島全体としての観光サービスを考えてとき、宿

泊施設や飲食店など観光地として必要な施設が十分とは言えない現状があり、なかなか島にお金落ちる体制が整っていないことが気がかりという。

島で起業を目指す人には「あまり、もうけようと思わない方がいいのでは」とアドバイスをおくる。

「会社員時代は、同じ写真屋さんでも店の前は人通りがあるのが当たり前でした。それが島では、丸一日お客さんが来ない日もあります。開業間もないころは、これでやっていけるのかと不安に駆られました。島で起業するというのは、このような現実を受け入れるということなのでしょう。のんびりやるのがいいと思います」

島での起業といえ、どうしても珍しい取り組みや声の大きい人ばかりに注目が集まる傾向がある。だが、写真館のように「なくても何とかなるけれど、あると島暮らしがちょっと豊かになる」といったサービスを始める人が、もっと増えてもいいのではないだろうか。



竹内 章（たけうち あきら）

1974年生まれ、富山県出身。フリーライター。元中日新聞社記者。2015年、長崎県五島列島の新上五島町に地域おこし協力隊として移住し活動中。